

江戸「人間教育」の知恵

往来物研究家 小泉 吉永



父の敵も母の慈も同じ愛情
(天保六年刊『女四書芸文図会』)

【第一四回】 山鹿素行の父道と教育論(二)

赤穂浪士を率いた大石内蔵助、幕末維新の精神的指導者・吉田松陰、明治の英雄・乃木希典など近世・近代の日本人に多大な影響を与え続けた山鹿素行。日本とは何か、日本人のアイデンティティは何かという根源的な問いに関して避けて通れない思想家であり、日本の文化や思想が国際的に注目される昨今、日本人として知っておきたい人物である。今回は、『山鹿語類』と並ぶ、素行のもう一つの教育論『武教小学』に士道の理念と武士教育の要点を学ぶ。

素行のもう一つの教育論『武教小学』

山鹿素行の教育論は、彼が四四歳の寛文五年(一六六五)に門弟等が編纂した『山鹿語類』とともに、彼が三五歳の明暦二年(一六五六)に門弟が講義録をまとめた『武教小学』に見られる。両者の間の約一〇年で素行の思想は、死に際の潔さに象徴される戦乱期の「武士道」から、天下泰平における指導者像を説いた「士道」へ転換

したとも言われる。本稿ではその思想的転換には触れないが、素行は『山鹿語類』では「育てる」立場から詳細な父道論を展開したのに対し、『武教小学』では主に「育つ」立場から武士の日常生活上の心得や子弟教育の要点を述べている。

まず「明暦内申(一六五六)八月、門弟子等謹「序題」と記された『武教小学』

武教小学序
大農大工木商爲天下之三寶、無農工商之業而所以爲三民之長者、無他、能修身正心而治國平天下也。然世遠人亡、鄉無善俗、世乏誠教、故或短衣蓬頭、而以怒臂、按劍爲俗、或深衣非服、而以記誦詩章爲教。其過不及、甚可歎息。予有宋、晦菴述作小學、而人生自八歲迄十四歲、教以灑掃應對進退之節、愛親敬長、親友之倫、且以嘉言善行爲終篇、其功偉哉。盛哉。然俗殊時變、俗之士所用尤泥着、則居闔閭而慕異域之俗、或學禮義、用異風、或爲祭禮、用異樣、皆是不究理之誤也。學者爲格物致知、而非爲效異國之俗也。況爲士之道、其始足用、異俗乎習之、於幼穉之時、欲其習與智長化、與心成之、事者誠先聖之實也。山鹿先生、武教之垂戒、其教甚明、也於先生之門、欲學士之道者、必以此教爲戒。其志何放、逸乎。生知之、質上品之士、外操何足習乎。然俗殘、教弛、則自陷溺、果

「武教小学」序文(『武教全書』上巻所収)

の序文には、本書を理解するうえで看過できない次の記述が見える(以下、原漢文を現代語訳または意識)。

▽農工商の如き生業を持たずに、武士が三民の長とされる所以は、「能く身を修め心を正して、国を治め、天下を平らかにする」からである。しかしながら、今や「善俗」が廃れ、「誠教」の乏しい世となり、武士は臂を怒らせ、剣に手を掛け、学者は「記誦詩章(詩文を暗誦するのみで実践しないこと)」の中国風情に陥る不適當な有様で、実に嘆かわしい。

▽学問の目的は「格物致知(物事の道理や本質を深く追求し、知識や学問を極めること)」にあり、異国の風俗を習うためではない。ましてや、武士の道を異国から学ぶ必要がどうしてあろうか。武士道は幼時に習うことが重要で、その習慣を智恵とともに深め、その心を育むことが昔の聖人の真心である。

▽武士は主君の俸禄に養われながら、民の長として外見・行動・知識が正しくなけ

れば、天下の賊民にほかならず、汗が出る程の恥辱の至りである。

▽本書の編纂・出版は山鹿先生の志ではなく、門弟の我々が先生の言葉を輯録し『武教小学』と題したものである。本書の教えを敬って学べば「浮靡蒙童(派手で浮ついた子供)」も「志士仁人(天下国家のために命がけて信念を貫く人物)」に変わる一助となる。本書をよく玩味し、おろそかにしてはならない。

この序文を見る限り、行住坐臥・座作進退(立居振舞)の全てが庶民の模範となり、治国・平天下を実現することが武士の存在理由とされており、既に『武教小学』において「士道」の考え方が本質的に存在していたことが分かる。

以上のほか、序文で朱熹が八歳から一四歳の心得を述べた『小学』を讃えている。『武教小学』は文字通り『小学』を参考にしつつも、独自の考えで綴った武士子弟用の士道入門書であり、次の一〇項に分けて武士の振舞としての基本を簡潔に説く。

- (1) 夙起夜寝——起床後の身支度から就寝までの毎日の生活態度。
- (2) 燕居——公務に就かない在宅期間中は学問や武芸をひたすら学ぶ。
- (3) 言語応対——他人との会話における言葉遣いや話題の心得。
- (4) 行住坐臥——外出中や在宅時の用心や礼法。
- (5) 衣食居——質素・分相応・適切な衣食住。



「武教小学」冒頭（『武教全書』上巻所収）

- (6) 財宝器物——貧民救済や文武に役立てるべきで、単なる蓄財は無用。
- (7) 飲食色欲——食欲・性欲を慎み適度に保つ。
- (8) 放鷹狩猟——民の生業を妨げず、領地・領民の掌握や軍事訓練のために行う。
- (9) 与受——金品の授受は道義に基づき適切に行う。
- (10) 子孫教戒——男児・女兒の育て方。

武家男女の教育を説いた「子孫教戒」

前記(1)～(9)は士道の基本で、それを身に付けた武士がいかに子孫に伝えていくかを最後の「子孫教戒」で論じている。その前半に男児教育、後半に女児教育の要点を記すが、記述量もほぼ半々で、父道とともに母道を重視した山鹿素行の考え方はここにも表れている。「子孫教戒」の随所で『孟子』『礼記』『論語』『列女伝』『小学』等を用いし、適宜語注を加えるがこれらは割愛し、以下に要点を掲げる。

▽己が死んだ後に子孫が勝手気儘であれば、家は絶え、子孫自身も身を滅ぼす。どうして真心の愛情から子孫を教戒せざるにいられようか。武士は「大丈夫（孟子）滕文公下によれば、富貴・貧賤・威武に惑わされず屈しない人物」こそ勇者である。深い愛情と信念や強い心で子孫を戒めないとしたら、志士仁人とは言えない。

▽子供が幼稚の間は生まれながらの天然の気を受けるのみで主体的な知恵がないが、日々の成長とともに善悪に染まってくため十分に慎む必要がある。張横渠（北宋の儒家）は「近年は、男女ともに幼い頃から驕惰（我が儘かつ無気力）で壊り了わり（駄目な子供になり）、成長するほどにますます凶狠（心が歪む）になる」と述べている。

▽武士が子孫を教戒するには、知を正し、機（氣）を勇にして、事（行い）に信あらしめる。それ故、知の発する時は邪正を考え、邪を戒め正を揚げ、勇を養って脅すことなく、小事と雖も詐偽を行わなことが大切である。遊戯は弓矢・竹馬

の礼、言葉遣いは武家礼法を以て教え、精気における情欲を抑えよ。また、文学を教えるが、記誦に陥り詩文に耽ると、日本の風俗を忘れ、中国の風俗を好むようになる。

▽人には気稟（気質）の違いがあるため、その軽重・清濁を考えて習い馴れさせよ。言葉が一通り身に付いたら師を選び、友を考え、品性が下劣にならぬようにせよ。師弟関係では恭敬を旨とする。兵書や武道書を汚れた席に置かず、手を洗い嗽いだ後に開き見よ。そして、師匠を父兄の如く尊ぶべきである。

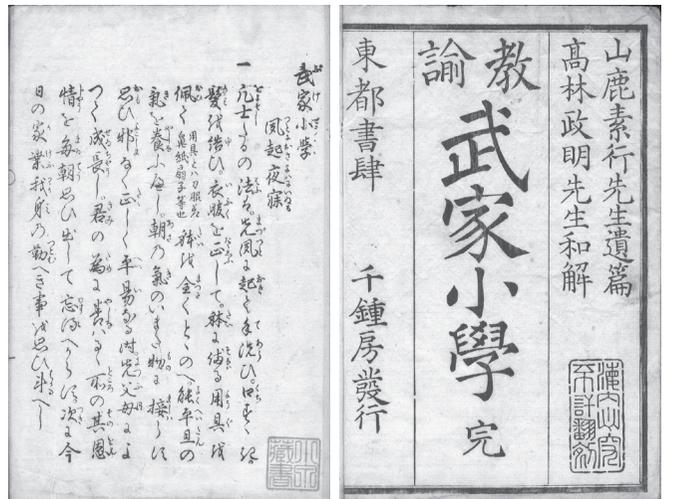
以上が前半で、後半は丸々女子教育に当てている。

▽女子の教戒は十分に慎まねばならない。世間では女子に懦弱（意気地のないこと）を教えることが多いが、大きな誤りだ。武士の妻たる者は、常に公務で忙しく、家内の事が分らない夫に代わって家内を治める義務がある。どうして懦弱で務まるだろうか。夫は内を知らず、妻は外を語らず。宮室を設けて内外を分かち、夫婦で着物懸けを別々にし、舅

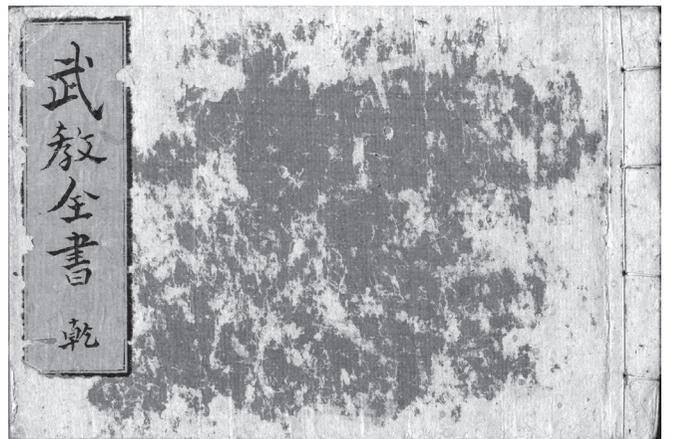
姑にはよく仕えねばならない。武将の妻は、婚家の盛衰で節義を易えない。また、盗賊にあい、敵に殺される場合もあるため、懦弱な教育では通用しない。女子は陰性で、体は柔、心は順の気質のため、柔順を用とし、よく果断（決断）することを掟とする。遊戯や言葉遣いが淫佚（みだら）であってはならず、義の正道を以て教え、武の本意を以て示せば、夫婦の道も正しく、人倫の大道も明らかとなる。

このほか、近年、女子に『源氏物語』や『伊勢物語』を教えるのは甚だ歎息すべきで、

1/3 広告



文政2年(1819)刊『武家小学』見返(右)と冒頭



嘉永2年(1849)板『武家小学』上巻表紙

これらは両夫に見えることを教える淫佚や
悠艶の書であるから、決して読ませてはな
らないと戒める。

『武家小学』成立後一六〇年以上を経た文
政二年(一八一九)、山鹿流兵学者の高林
政明がその主旨を平易な仮名書きに改め、
『武家小学』と題して刊行したほか、山鹿
素行の代表作である『武教全書』(明暦二
年作)の巻頭にも収録され、天保一五年(一

略を述べた『武家小学』序文を本文よりも
重視し、「此序ノ大意ヲ能々吞込給へ」
と開口一番に述べている。「士道」と「国体」
の精神を後世に伝えるには、中国生まれの
『小学』では片手落ちであり、「国体ヲ失フ
様ニ成行クコト免カレザルヲ、先師(山鹿
素行)深ク慮リ給フ。是、『武家小学』ヲ
作ル所以也」と述べ、「武家小学」の本質
を次のように突いた。

扱其士道・国体ハ甚切要ノ事ナレバ、幼
年ノ時ヨリ心掛サセ、工夫サスベキコト、
是、『小学』ノ本意ニテ、詰リ、志人仁人
ト成ル様ニトノ教誡ナリ。是、此序ノ大意、
即チ、此書ノ大意也。

八四四)板以後たびたび刊行された。また、
『武家小学』から二〇〇年後の安政三年(一
八五六)には、素行を信奉する吉田松陰が
親戚子弟に『武家小学』を講じた講義録『武
教全書講録』(本書には『武家小学』以外
の記述がないため、事実上『武家小学講録』
と言すべきもの)を著し、慶応四年(一八
六八)に松下村塾より刊行されている。
同書で松陰は、「士道」と「国体」の大

「『武家小学』の旨趣を国字になして童蒙
の便にあらしむ」とした高林政明の『武
家小学』では、どういうわけか『武家小学』
の序文が丸々省かれていた。しかし、松陰
はこの序文こそが本書の真髓と見なし、そ
こに二〇〇年前に先師が抱いた後顧の憂い
を読み取ったのである。